

を御はらせ三十六町を一里と御定め、塚を一里ごとに御築せ候、其後家康様御代に、江戸日本橋を道のはじめと被成、東西南北の國々へ繩を張、これも三十六町を一里にして、一里毎に塚を御築せ、塚ごとに上に榎木を植申候、

〔頃鼠漫筆六〕一里塚起原

諸國に一里塚を築かせられしは、慶長九年と云を正しとすべし。○中略さるを江戸町年寄樽藤左衛門由緒書に、慶長十七子年、東海道、中山道、一里塚出來候御用、樽藤左衛門、奈良屋市右衛門兩人江被仰付、藤左衛門道中罷越、差圖仕爲築立罷歸候、銀子拜領仕候、奈良屋市右衛門由緒書亦同トあるは誤りなるべし。○中略さて此一里塚は、織田家御當家等の新儀にはあらず、漢土の古事に據られしなり、さるは北史卷六十四列傳五十二孝寬傳に、廢帝二年、爲雍州刺史、先是路側一里置一土塚、經雨頽毀、每須修之、自孝寬臨州、仍勒部内、當塚處植槐樹代之、既免修復、行旅又得庇蔭、周文後見、怪問知之、曰、豈得一州獨爾、當令天下同之、於是令諸州夾道一里種一樹、十里種三樹、百里種五樹焉、とあるをみるべし、土塚は則一里塚にて、こは慶長九年より、千百餘年の古へに係れり、但先是とあれば、猶上古より有けるなるべし、

〔徳川禁令考五十九 經壤端界〕慶長九辰年二月

諸海道ニ一里塚を築く事

二月四日

一將軍家被仰出、諸海道ニ一里塚つき可申由、右大將家江被仰越、則諸代官ニ被仰付、道中ニ是を築、道之兩方ニ松を植可申由、右大將家より本多佐大夫、永井彌右衛門奉行に被仰付、東海道中山道より築初むる、當植代年錄、但月日雖不詳、今據家忠日記、慶長日記、係今日度木ヲ植サセヨト有シナ聞チガヘ、榎木ヲ植シトイヘリ、松ハ御稱號ヲ賢慮有テナリ、創業記係八月云、秀忠公ヨリ、諸國道路可作ノ由御使相上、廣サ五間也、一里塚五間四方ナリ、關東奥州迄右之通也、木曾路同如此ノ